

1. 団塊の歩み

終戦後数年間に生まれた我々の世代は、その異常な多さから「団塊世代」とも呼ばれている。常に世代内競争にさらされ、他世代を圧迫しつつ、ようやく年金生活年代に到達した。母体の栄養不足で、ヤギの乳で育ったと聞かされていた身としては、とにかくここまでたどり着いたことに感謝したい。ただし、これから先も、「待機遺骨」が心配されるほどの過密な状況は変わらず、長寿命化で生産年齢世代への負担をかけることは間違いない。この現実を乗り越えるのもまた、たくましく生きることを鍛えられた、我々自身の底力であろう。

団塊世代は数が多いだけでなく、日本の激変と共に生きてきた。小学生になった年のテレビ受信契約は、まだ10万台程度であったが、電気掃除機やガス瞬間湯沸かし器などが次々に登場し、生活は目に見えて変わっていった。中学生になると、空前の高度経済成長期に入り、カラー放送が開始された。そして、あまりの生徒数の多さに、南山小学校に間借りして始まった城南高校入学の年に東海道新幹線が開業し、第18回東京オリンピックが開催された。大学入学時には、日本の人口が1億人を突破し、大学院入学前年の大阪万博には1週間も通い詰め、未来の予感にワクワクしたものである。工学博士の学位を得た1976年には戦後生まれが人口の過半数を超え、教授になった1994年頃にはインターネットが急速に普及し、世界がリアルタイムに連動する時代に突き進んだ。

日本の成長と共に育った我々には、物も生活も社会も変わるという確信と、変わることを恐れないう心構えがある。また、人数が多すぎて目が届かないことも幸いし、良く言えば自分で決めてきた。まさに、心理学者のマズローが言う、生きるための生命欲求に始まり、平穏な生活が続くことを望む安定欲求から、ある階層やグループへの所属欲求、そこでの承認欲求と、それぞれの年代での欲求を満たし、ついに自己実現欲求レベルに達した。知人たちの定年後は、企業・大学を問わず、歴史や芸術系を学び直したり、晴耕雨読的な生活を始めたり、海外で新たな仕事を始めたりと、様々である。

実は私も、還暦あたりから「変わりたい」意識がモヤモヤし始め、家族や職場への周到的な裏準備の後、65歳の定年1年前に退職した。「人生の転機は、タイムアウトではなく、リセットして迎えたい」と見栄を切ったが、これからは自他の自己実現のために、何かをしようと思いついたためでもある。リセットであるため、大学や学会とはすっぱり縁を切り、ついでに結婚式の写真も捨てるほどの徹底的な身辺整理（離婚したわけではない）をして、身軽に、気兼ねなく個人として活動することにした。

2. 自己実現の物作り

多数の矛盾する欲求があるとき、世の中は、「最大多数の最大幸福」原理で動く。現在の身近な工業製品は、その使用に大きく関わる身体特性について90%程度の人に支障が無いように作る。逆に言うと、上下5%の人は、最初から切り捨てられている。一例として、21cmや25cmの婦人靴を探すのが大変なのは、足長21.5cmの女性は4.9%、25cmは3.4%しかいないからである。しかし、日本の人口を、男女×年齢3段階の6つに分けたとしても、それぞれの区分は約2000万人で、切り捨てた片側5%は100万人にもなる。したがって、この人たちに向けての新たな市場を開拓できるなら、製品としても十分成り立つ。

一般に物への要求は、存在すること自体や価格などの物質的価値から、意匠や話題性、ブランド

などの情動的価値に移り、最終的に私的な関係的価値に移る。これを前述のマズローの欲求レベルに対応させると、生命欲求や安定欲求レベルでは物質的価値を、所属や承認欲求レベルでは情動的価値を望むが、すでに物質も情報も過剰状態の日本では、年齢に関わらず自己実現レベルに到達し、流行などよりも自分が欲しいかどうか、すなわち、自分と物との関係的価値を求める割合が高くなっているように見える。このような成熟社会では、関係的価値を感じない物には、物質的価値、すなわち機能を果たす限りなく安い物を求める。これが、様々な分野で起こっている製品やサービスの二極化の背景であろう。さらに、今後ますます増大する高齢者層は、若年層に比べて体力から好みまで、幅広く分布することに特徴がある。この点からも、人を平均化し、物を標準化することで高品質低価格な物を提供してきた工業化社会は、大きな転機を迎えていると言えよう。

ただし、マニアックな収集品や適合サイズなどは別にして、日常生活における関係的価値は、極めて漠然としていることが多い。しかし、課題は不明確でも、その解の適否は判断できるため、そのような物に出会えば、「あ、これ欲しい！」と思える。このように、関係的価値の多くは、作り手側が、日常の何気ない会話や観察から相手の本音に気づき、作ってみせることで共感を得るような、発見されることを待っている価値なのである。

このような発想で、在職中には、長時間ドライバーの嘆きを改善したシートとそれを応用した集中作業用ワークステーション、「帰りにブーツが履けない」とつぶやいた女性に送った足のむくみを軽減する女性用オフィスチェア、母の介護から学んだ前屈作業支援衣服など、様々な製品を世に出し、引き続き、ノートPC用チェアなど、いくつかの企業と新たな開発を行っている。

3. 自己実現の人作り

退職後は、企業の物作り人材育成にも取り組んだ。近年の物作り教育は、研究成果を重視する大学と技術教育の余裕を失った企業の狭間に落ち込み、多くの学生たちは理論と現実との橋渡し経験がないまま企業に送り込まれている。また、企業ではバブル期の大量採用人材が活躍中で、若手には責任ある仕事が回ってこない。しかし、新製品開発や海外進出の経験豊富な層も、その資産を引き継げないまま徐々に退職する時期になり、次のリーダーや取り残された30代の育成が、業種を問わず大きな課題になりつつある。このため、主体的創造力の育成装置である大学の研究室機能を模し、隔週土曜日に企業内ゼミを開催した。業務とは異なるテーマでの問題発見から成果報告までの一連の作業や、異職場・異職種のチームワークも経験させたため、終盤は家庭崩壊寸前の体力・気力に挑む作業であったが、16名が全員脱落することなく成果報告を行い、「自分を見つめる機会にもなった」と言ってもらえたことは、うれしいことであった。自己実現の一步である。

というわけで、退職後も、曜日に関係なく仕事モードで過ごしている。無理になったら、また、次の何かを見つければよい。元々、ほとんど何も無かったのだから。

<http://bizmakoto.jp/bizid/articles/1405/16/news070.html>